

日本におけるカバディの受容と展開

花岡 築

キーワード：カバディ、インド、東金市、仏教

1. 研究の動機

筆者は教育実習の授業として行われたカバディを見た際、競技に興味を持った。

あまり、カバディをしたことがあるという人は周りにいなかったが、競技を知っている人は多い印象を持った。そこで、カバディというスポーツが日本においてどのように受け入れられて、発展したことで認知されているのかという点に興味を抱いた。

2. 研究の目的と意義

本研究では、日本においてカバディがどのように受容され、展開しているのかを明らかにすることを目的とする。今まで明らかにされていなかった通史的な研究を行うことで、他国で生まれたスポーツがどのように受け入れられ、展開されたのかの一例を示すことに意義がある。また、本研究により、カバディへの関心が高まり、普及の一助となることを願う。

3. 先行研究の検討

カバディの教育的効果や、競技選手の体格、コーチング論に関する研究は見られるが、日本におけるカバディを通史的に研究しているものはなかった。

また、金子(2000)はカバディがどのように誕生したかを研究の中で述べているが、日本にどのようにして伝わり、どのような活動が行われてきたかの詳細については明らかにされていなかった。

4. 研究の方法

本研究では、日本がカバディを受容する時期と、日本でカバディが展開を見せる時期に区分した。その中でも、日本がカバディを受容する時期では、カバディが誕生し、スポーツとして形になり、国際化を図る中でどのように日本に

伝えられ、それがどのように受け入れられたのかという観点に注目して記述した。日本でカバディが展開を見せる時期では、黎明期にどのような展開を見せたのか、一度は展開が途絶える危機を迎えたがどのように復活したのか、現在にかけてどのように展開し今後はどのような展開を見せることが予想されるのかという観点に注目して記述した。

論拠は、一般社団法人日本カバディ協会の協会誌、協会に携わる方々へのインタビュー、さらには、カバディが盛んである大学に関する史料、協会の活動を支えている寺院からとした。

5. 本論

5.1 日本におけるカバディの受容

カバディは、インドで誕生した。インドの二大叙事詩の一つである『マハーバーラタ』をもとにして作られ、息の文化を重んじるヨーガの要素が取り入れられた。誕生した当初は、子どもたちの遊びとして存在していて、コート of の広さなどのルールもその場で決められていた。

1918年、インドのマハラシュトラ州でカバディの大衆化を推進する動きが生まれた。州の条例に導入するなど、努力を重ねた結果、インドで国家的な地位を築いた。1936年のベルリン・オリンピックでデモンストレーション競技が行われ、成功を収めるとともにスポーツ化を図る動きが進んだ。その後、1950年に全インドカバディ連盟、1972年にインド・アマチュア・カバディ連盟、1978年にアジア・アマチュア・カバディ連盟が組織され、それに伴い、ルールも整備されたことでスポーツ化した。

スポーツ化を果たしたカバディは、インド近隣諸国へ広まりを見せる。これは、連盟のアジア遠征など、地道な努力の賜物である。また、

国際化を見せる活動の中で、アジア大会への関与が大きい出来事であった。1982年にニューデリーで行われた第9回アジア大会でデモンストレーション競技となり、1990年の第11回アジア大会からは正式種目として名を連ねるようになった。これにより、アジアで浸透するようになった。

カバディが国際化を図る中で日本にも伝えられた。1979年9月8日、インドから日本の空手を学ぶために来日したA・K・サハ氏が、空手家の鎌形勇氏にカバディのことを話し、興味を持った。それがサハ氏の帰国後にアジア・アマチュア・カバディ連盟のアール・ラーハ氏に伝えられた。外務省顧問の我妻和男氏の紹介により、同年の11月8日千葉県東金市で実地指導が実現した。

5. 2 日本におけるカバディの展開

東金市でカバディの実地指導が行われると、様々なメディアがカバディを取り上げた。その中で東金市の当時の市長の早野尚治氏がカバディに大変興味を持った。その後、日本アマチュアカバディ協会が設立されると、早野氏が会長となった。早野氏を中心とした協会は、インドやバングラデシュからチームを招聘したり、反対に遠征したりするなど、大変精力的に活動していた。

しかし、日本選手団がインドから帰国して間もなく、早野氏が病床につき、息を引き取ってしまった。会長職は当時衆議院議員の石橋一彌氏が引き継ぐことになったが、そのまま活動は頓挫し、休眠状態に入ることになった。1988年3月、日本アマチュアカバディ協会の設立に携わった我妻和男氏と空手界の伊藤秀一氏が日本のカバディの復活のために渡印し、サハ氏のもとを訪ねた。そこでサハ氏の来日を招請し、4月6日の来日が実現した。サハ氏は来日すると石橋会長と会談した。その中で、カバディチームを作るべきだという提案があった。協会は我妻氏を通じて、二松学舎大学教授の新井慧誉氏に同協会の理事になること、二松学舎大学

でカバディチームをつくることを要請した。新井氏は同大学の保健体育担当の金子茂氏と森本富子氏を集め、チームを結成するための懇談会を開いた。そして、それぞれの担当の課外活動などから生徒を集めた。チームをつくることが出来るだけの人数が集まると、懇談会が発展的解消する形でチームが結成された。

協会の活動や運営は住職が大きく支えた。インド発祥のスポーツであることやヨーガの要素が入っていることは仏教系の学生に受け入れられやすかった。競技をしていた住職やその仲間が協会に寄付をすることで運営することが出来たというのは日本におけるカバディの一つの特徴である。

現在はカバディを題材にした漫画『灼熱カバディ』が人気を博しており、今後のさらなる展開を予想させる。

6. 結論

カバディはインドで生まれ、子どもたちの遊びとして親しまれていた。20世紀に入り、カバディを大衆化しようとして、協会が整備され、ルールが統一されていった。すると近隣諸国へ広めるようになった。日本にもカバディの存在が伝えられ、興味を示すと実地指導が実現した。

実地指導が行われた後、日本アマチュアカバディ協会が設立された。設立直後は精力的に活動していた。しかし、会長の急逝とともに協会の活動は頓挫し、休眠状態に入った。およそ6年の時を経て、日本でカバディを復活させようとする動きが起こった。アジア連盟の助言もあり、チームをつくることで展開は確実なものになった。カバディの競技性は仏教系の学生によく受け入れられ、それにより、協会の活動や運営は住職により支えられた。現在は、カバディを題材にした漫画が人気を博しており、今後のさらなる展開を予想させる。

今回の研究で異国の文化が受け入れられる一つの形が明らかになった。そこには住職の関わりなど独自性の人の繋がりがあった。

(指導教員 秋元忍)